「新しい学力観」提言の原点に帰って

センター協力研究員（品川区立中延小学校校長）　重　松　清　文

6年生，23名に「テストにつまずいたとき，あなたはどのように思いますか」と，いわゆる原因帰属を尋ねるアンケートを「努力」「運」「頭が悪い」「疲労」「勉強のやり方」の5択で行った。「頭が悪いから」を選んだ子供が6名（26%）もいたのには驚かされた。その後，6年生の担任と話したところ，このような結果が出てくる背景として子供たちがもっている「点数主義」「手続き主義」「結果主義」の学習観が指摘された。このような学習観が形成される原因としては，偏差値を中心とした塾の在り方，点数偏重の親の意識，中学年あたりから形成された算数苦手意識などの影響が大きいことが考えられる。そのような学習観が学級を覆うと，「わからない」ということが言いにくい雰囲気ができてしまい，個別指導の手がかりが摑みにくいという担任の悩みも聞いた。

子供たちが自らの学習について考える強力な材料は，テストの点数が支配的である。今日においても学びはテストでよい点数をとるためのもので，テストが終われば頭の中に集積された知識は剝離されていくことが多く，生活や文化の文脈から乖離した学びが支配的であると言わざるを得ない。「分数のできない大学生」などと，センセーショナルに「学力低下」が叫ばれているが，私から見ると大学生になるまでに，小学校や中学校で学んだ知識が，生活や文化の文脈の中で生きて働くような学習環境が設定されず，伝達的な教科学習とテスト終結型の学習の循環の中に置かれ続けられていたことの方が問題だと言わざるを得ない。

このような問題は，日本だけではない。全米数学教師の会（NCTM）がアメリカの今後の数学教育を提言した「STANDARDS for School Mathematics」でも「さらに重要なことは，子供たちが数学を学ぶということは知識を磨く経験であるという信念を失い始めているということである。子供たちは，知識を創造する活動的な参加者というよりも，ルールや手続きをただ受身で受け取る人になっている。」と指摘しているのである。

「新しい学力観」が提唱された背景には，実は学校が完成教育の機関であった時代の教育，つまり大学を頂点とした親学問を教科に分化・系統化して下級教育機関に降ろした「伝達と受容」の教育だけでは生涯学習の時代の要請に応えられなくなったということがある。自分の生涯を常に学び続け，常に新しい知識と力を身に付けていくことが求められる時代になれば，学校で身に付けるべき学びの内容・基礎，基本の内容の在り方が変わるのは当然と言わざるを得ない。意欲や関心，自ら課題を見付け，自ら考え解決する力，自らの責任で判断・行動する力，いわゆる「生きる力」が重視されるのは当然のことと考える。

もう一つの背景として，「新しい学力観」の教育心理学的な背景に注目しておきたい。市川伸一先生は，「従来の行動主義に基づく教育（それは，「行動主義」とは独立に，伝統的な我が国の授業でしばしば見られたものである）が，教科の論理が先に立って知識・技能の効率的な伝達という方向になりがちだったのに対して，「知識は認知主体によって構成されるものである」ということが，さまざまな研究を通して明らかにされてきた。学習とは，学習者の能動的な関わりが不可欠の条件である。したがって，関心や意欲を高めなければならないし，学習者は自分なりの学習ストラテジーを身につけていく必要がある。こうした「自己学習力」を備えた学習者のイメージは，まさに認知心理学の影響を強く受けた当時（1970年～80年一筆者）の教育心理学が描き出すところのものである。」（教育心理学フォーラム・レポート）と指摘されている。

能動的に知の再構成を図っていく学び。「新しい学力観」は，このような力を育むために，生涯学習時代と新しい教育心理学を背景に提唱されたものであることを，改めて確認したいものである。